心の栄養剤No.215『運を貯め、運を残していこう』

　日本人は昔から良いことがあると「運が良かった」と言い、その逆は「運が悪かった」と言う。時代劇を観ていると「天が味方した」とか「天に見放された」という言い方をよく耳にする。

　随分前に参加したセミナーで**「幸運」「強運」「天運」**の話を聞いた。

　「幸運」は、自分で努力して頑張れば手に入れることができるもの。たとえば、頑張って勉強した結果、資格試験や大学受験に合格したとか。努力が報われた人は幸運な人だ。

　「強運」は、自分の努力にプラスして家族や仲間など、周りからの応援もあって夢を叶えたり、苦難を乗り越えられるエネルギーだ。そのためには日頃から愛と絆の信頼関係が欠かせない。

　「天運」は、天が味方したと思わざるを得ないような奇跡を起こしたり、国家的運勢を引き上げられたり、そんな人物が持ち合わせている。サッカーの国際大会で勝利すると国全体が歓喜に包まれるが、天運にはそんなエネルギーがある。

　世の中には生まれつき運の良い人がいる。生まれてきたらそこが大金持ちの家だったり、親が著名人だったりすると、そこから人生をスタートできる。上位でたすきを受け取った駅伝選手のような人だ。

　そうでない環境下で生まれた場合、たとえば下位でたすきを受け取った選手は自力で順位を上げなければならない。冒頭に述べた「運気上昇を意識してきた」とはそういうことで、「運気が上がるようなことを積極的にし、運気が下がるようなことはできるだけ避ける」、そんなことを意識してきたのである。

　ところが、壮年期も終盤に差し掛かった昨今、**「運とは『良い・悪い』で表現するものではなく、『貯める・使う』で表現するもの」**という話を聞いて驚いた。

　喜多川泰さんの小説『運転者』は、仕事につまづいて自信を無くしている主人公の修一が、「運が良くなる場所にお連れするのが私の仕事です」と話すタクシードライバーと出会い、運を好転させていく物語である。

　人生には運を貯めるポイントカードがあり、良いことをすると運が貯まる仕組みになっているという。

　一般的にポイントカードというものはポイントが全部貯まらないと使えない。あと1ポイントでいっぱいになるカードを持っていても、そこで人生を終えたら、もう使えない。しかし、人生のポイントカードはそれを誰かが引き継ぐことができる。

　修一の亡き祖父・良蔵が登場するシーンがある。良蔵は戦争でサイパンにいた。

　伊勢出身の戦友が「最後に赤福が食べたかった」とつぶやくと、良蔵は蕎麦の話をする。「うちの田舎の蕎麦は絶品なんだ」と。

「お前は最後にその蕎麦を食べたかったんだな」と戦友が言うと、「いや、俺には生まれたばかりの息子がいる。あいつが食ってくれるからいい。**あいつに蕎麦を食わせるために俺は明日死んでいくんだ」**、そう言って良蔵は笑う。

　「笑う」ということは「これでいいんだ」ということだ。

　これが運を貯める生き方というものなのだろう。必ずしも目の前に素晴らしいことが訪れなくても、たとえ苦難や不幸なことが起きても、それを「運を貯めるために必要な経験」と苦笑しながら受け入れることだ。次の世代がその運を使ってくれればそれに越したことはない。その物語はそう語り掛けてくる。

　大人は子どもに「夢を持て！」と言うが、子どもが夢に向かっていける未来を私たちは準備しているだろうか。不安や心配の種のほうを蒔いてはいないだろうか。
　次の時代を生きる子ども達が良い時代を生きていけるように、**この国の先人たちは運を貯め、運を残してきた。**それは間違いない。
　少なくとも自分がこんな恵まれた環境の中で、こんな仕事をしていけるのは、親をはじめ、先祖が貯めてきた運を使っているとしか考えられない。
　いつの時代も大人がやるべきことはそれに尽きるのではないかと思う。
　そうそう、言い忘れていた。その物語によると、**運を貯める生き方の基本姿勢は、いつも上機嫌いること**だそうだ。
　つらい時は「これは運を貯めるために必要な経験なんだ」と気を持ち直して、少し笑顔を作ってみよう！！

今月18日は敬老の日です。
　私の両親も妻の両親も亡くなってしまって、今までの”敬老の日”はおじいちゃん～おばあちゃんに感謝を伝え慰労するという”当たり前”がなくなってしまいました。そして今から先は私達夫婦が敬老の日を祝ってもらう対象者になっていくんだろうと思いますが、次の時代の子ども達に対してしっかり**運を貯め、運を残して**やれるように心掛けながら、どんな時にも**機嫌よく過ごしていかなくてはと思います！！**

くすりのキュート　倉光　浩城
※ご相談がございましたら、いつでもお電話くださいませ☺️
TEL（090-8357-2904）